



アメリカ近況リハビリ医療視察

～カリフォルニアの青い空の下で、ふたたび～

伊予病院 脳神経外科

村上佳和

1. Ronald Reagan UCLA Medical Center

なんと15年連続で米国西部の最優秀病院に輝いている病院である。一般には1階のカフェテリアへの出入りは許されるが、日本の個人病院クラスでの見学・案内が許可されるのは非常にまれで光栄なことである。このCenterの見学は全世界から申請される。しかし許可されるのはほんの一部、今までのCenterへの貢献度（寄付）とコーディネーター（Sheena）の巧みで粘り強い交渉のおかげである。感謝！



堂々たる正面玄関

1999年から8億2900万ドル（約663億円）をかけ建設され、新たな器材購入には10億ドル（約800億円）以上を費やし2008年6月29日フルオープンとなった、ベッド数668床の非営利・独立経営の病院である。

1階にはCenter正面玄関のほかそれぞれ Mattel Children's Hospital UCLA（マテル小児病院）、Stewart and Lynda Resnick Neuropsychiatric Hospital at UCLA（レスニク神経精神病院）、David I.Saperstein Emergency Center（救急センター）の玄関がある。つまり本院と二つの病院および一つの部門の複合体がこのMedical Centerなのである。



マテル小児病院の玄関フロアー

UCLA Health Systemの一角にそびえる Reagan 元大統領の名が冠された地下2階、地上8階の巨大なビル、これが Ronald Reagan UCLA Medical Center である。

アメリカでは "donation"（寄付）という言葉が頻回に聞く。小児科部門はおもちゃメーカーMattelの寄付によって造られたのでその名が付けられている。さすがおもちゃメーカーである。ここには病院というイメージはない。



アメリカの病院では患者さん同様その家族も大切にする。1階には手術・処置を受ける患者さんの家族の為に広くて快適な待合室がある。MADDIE'S ROOM という。(マディの部屋)

MADDIE'S ROOM (Surgical Waiting Room)

病室は3~8階にあり、すべてビルの窓側に配置され(ドーナツ状の配置で中央にナースステーションなどがある)窓から常に青い空と穏やかな景色が眺められるようになっている。日中に窓から十分な日光を浴びることは、夜間の不眠を防ぐのに効果的であるという説明。生理学的にも納得できる。



すべての病室の窓からこの景色



やはりベッドは日本のより大きく、機能も最高である。

一般病室のベッド

今回の見学では UCLA の現役脳外科医にお会いできるという、うれしくもあり、心のどこかではご辞退したいような企画が用意されていた。そして事前に UCLA から「脳外科医の中でも、どの専門分野の医師に会いたいのか？」との親切な問い合わせがあり、図々しくも「脳卒中の緊急手術をやっている先生にお会いしたい」と、お願いしていた。そして軟弱なことに「できれば日本人の医師を希望します」とも付け加えていた。

案内してくれたのはリハビリ部 Director の Ellen Wilson 嬢であった。

彼女の「彼は非常に優秀な脳外科医です。」という前振りの後、タイミングよくエレベーターから降りてこられたのが、小柄でやさしそうな男前、

Nestor Gonzalez, MD (ネストル・ゴンザレス博士) であった。



彼の専門は血管内手術であり、月 10～15 例（年 120～150 例、これは多い!）の手術をこなす。

手術内容は脳動脈瘤コイル塞栓術、内頸動脈ステント留置術などの脳卒中の血管内手術。術後 2～3 日で自宅退院する患者もいるが、リハビリが必要な患者は術後 2 週間でリハビリ専門施設に移す。

質問にてきはき答えながら彼のホームグラウンドである血管撮影室に案内してくれた。

二つの撮影室が並んでおり、片方では脳血管撮影（浅側頭動脈—中大脳動脈吻合術後の血管撮影。非常にすばらしい手術結果。）

もう一方では腹部の血管撮影（腹部解離性動脈瘤）をしていた。ゴンザレス先生が「日本の脳外科医が見学に来た」と紹介してくれたので、親切にスタッフは画像を説明してくれた。モニターが日本より大きい。

Dr.ゴンザレスと RP-6 ロボット

次に面白いものを見せてもらった。

現在 UCLA では写真の「RP-6」というロボットをテストしている。

この身長約 165cm のロボットの顔の部分には医師の顔が写され、患者は医師を見て会話することができる。一方、医師はモニターに映った画像を通して患者の声を聞き、観察することができる。ロボットをコントロールし患者のベッドサイドへ連れて行き、ベッドサイドのモニターを拡大して見ることもできる。

これにより、医師は自宅や診療室からいつでも患者をモニターし、アクセスすることができるというスグレモノである。

このテストには「医師がこのロボットを使い、患者やその家族と接する回数が増えれば、患者の治療改善、入院期間の短縮、費用削減の可能性につながる」という研究結果がちゃんとベースにある。

さすがアメリカである。

今回 UCLA の脳外科医にお会いできるということで、日本出発時には用意していた質問を完璧に暗記していたが、本番では完全に舞い上がってしまい単語をつぶやく程度しかできない。一緒に見学していた Nicole は失望とあきれ顔。

用意していた質問を前もって Sheena に見てもらっていたので助かった。

最後には、専門的な質問は、たまらずメモを直接見せようという暴挙にでた情けない私だった。それでもゴンザレス先生は、にこやかに “Good question !” と言いながら、ちゃんと答えてくれた。アメリカの脳外科医はやさしい。

1 階のエレベーターホールでお礼を言って別れる際に、Nicole の哀れみながら「最期のチャンスやど〜」と、せかすまなざしに押されメモを読みながら

“ This is the last question. What do you think is the most important thing for a neurosurgeon ? “（最後に、「脳神経外科医にとって最も大切なこと」は何だと思われますか？）と質問した。

“ team, team work “ 迷いなく自信をもって、彼は答えた。

そして “ Do you have a good team ? “ と問い返してきた。

アメリカの脳外科医にあらためて「チーム医療の大切さ」を教わった。



UCLA の優秀な脳外科医と日本の平凡な元脳外科医

続いて、典型的なアメリカの知的な女性という感じのエレンに代わり、小柄でキュートな Christy Rose Malbrew 嬢が案内してくれた。彼女は PT であるが PT の中でも日本にはない “Doctor of Physical Therapy” (PT の博士号) をもっている才媛である。

Dr.ゴンザレスの話の中に「古い病院でリハビリする患者もいる」と言われたが、この「古い病院」とはどこなのか？と思っていた。

彼女はその病院を案内してくれた。



Medical Center 前の横断歩道を渡ると

「古い病院」こと Semel 研究所 →



Medical Center の真向かいに「古い病院」こと Jane & Terry Semel Institute for Neuroscience & Human Behavior (Semel 研究所)がある。

ここは本来神経および精神疾患の研究、教育を行う研究所であり、患者さんは 1 階の 15 床のベッドに入院しリハビリおよび看護を受ける。したがって、リハビリスペースは狭く、スタッフも少なく、器具も古い。

クリスティ嬢は丁寧に案内してくれ、リハビリの器具等も説明してくれるが、わが伊予病院と比べると診療所と病院ほどの差がある。

クリスティ嬢ほどの才媛でさえも「はるか海のかなた、東洋、シパングのリハビリ」の現状など知らないのである。

おそらく「日本のリハビリ」と聞けば、紙と土で造った家の中で、太極拳のようなことをさせているんだろうと想像するのであろう。

仕方ないことである。

わたし自身も「遠くアフリカ、ケニアのリハビリ」と聞いたら、PT,OT の横に必ずキリンも立っているだろうと想像するように。



「古い病院」といえども病室は立派



ベッドの前のホワイトボード

今、米国ではリハビリに「任天堂の Wii」を盛んに取り入れている。これは、「ウィーハビリテーション Wiihabilitation」と言われその効果は認められており、ここでも使われていた。また「古い病院」といえども、各病室（もちろん個室）の清潔さ、大きく機能的なベッドは素晴らしいと思った。ベッドの前のホワイトボードに、患者さんが自分で確認できるように「今日は何月何日何曜日、主治医・ナース・担当リハビリスタッフの名前」が毎日書かれることにも感心した。



PT 博士 クリスティ

リハビリ部 Director エレン

Dr.ゴンザレス、エレン嬢、クリスティ嬢、そして、緊張しながらも充実した時間に感謝しつつ、車の中では宿舎のジャグジーの気持ち良さを常務と語り合いながら家路についた。

2. Rancho Los Amigos National Rehabilitation Center

ロサンゼルス市中心街から南東 21km のダウニー (Downey) 市に、この病院はある。米国のリハビリ専門病院としては、常にトップクラスにランクされ、脊髄損傷やポリオ後症候群の治療に果たした革新的な功績は世界的に知られている。

その歴史は古く、1888 年ロサンゼルス郡病院から住まいのない貧しい患者たちをこの農場に移したのが始まりである。スペイン語の病院名が「友人の牧場」を意味するように、当初患者は農業に従事し、のんびりとした風景であった。1894 年バーモント州ラトランドとプロクターにおけるポリオの米国最初の大流行を皮切りに、米国のポリオの集団発生は毎年続き、その麻痺患者を受け入れ、治療のため 1927 年に PT、1929 年には OT が開始され、この病院はリハビリ専門病院として歩み始める。米国の「リハビリの歴史」は「ポリオの歴史」でもあるらしい。

現在ベッド数は 207 床、実質 150 床を使い、入院期間 2~3 週、年間 4000 人の入院患者とのこと。この病院は外来リハビリを主体としており、週 2 回、1 日 1 時間のリハビリに年間ナント 78,000 人！が訪れるとのこと。



広大な敷地でどこに
いるのか？
どこを撮れば
いいのか？
わからない。
まあこれはウチの屋
上の「伊予病院」の看
板のようなもの。

まず案内されたのは、Rehabilitation Engineering (リハビリテーション工学) 部門。ここでは身体の失った機能を補う機器をその人に合わせて作ったり、使い方を練習したり、その人に合ったものをレンタルする。

これは「Assistive Technology」と言い 1988 年に米国で制定された「障害者用機器支援法」によると、「障害者の身体機能を維持、増進、改善するための機器類ならびにシステム」と定義され、使用者のニーズに即した処方、適合や利用のための訓練などを含むサービス全体を表現している。

日本では「福祉機器」とか「支援技術」と単一のもの？として訳されている。



各種メーカーのスピーチ装置

例えば、失語症、自閉症、ALSなどで言葉を失ったり、使えなくなったりした場合、左の機器を使う。単語や文章を入力すれば言葉をしゃべる。小児用ではイラストや絵のボタンを押せばしゃべる。



青シャツの彼がこの部の主任。眼だけでPCを操作するタダシ。

身体の一つの部分（眼、舌、指1本）を動かすことさえできればPCは操作できる。これは眼の動きだけで、PCを起動し、カーソルを動かしている。



アメリカにもいた真の職人

あらゆる障害者を想定して作った主任自家製スイッチ類。特許についてたずねると「どこにでも売っている物で作っていますから特許など考えていません。」平然と答えた。



色、形 やはりアメリカ

一つ一つの物が考えられ
工夫された障害者のための
キッチン。
パッと見は分からないが、
説明を聞くと全て理にかな
っており感心、感嘆する。



柔軟な発想の産物

「洗面台の収納部の扉を
開け底を切り抜けば
それだけで、車椅子用の
洗面台になります。」と。



主任絶賛の SUPERBAR

「これは絶対おすすめ、
ネットで注文できます。」
と彼が最後に薦めたもの
が、この手すり。長さを
自在に調節できるよくあ
る「つかい棒」の長い
ものであり、天井と床の
間をつかえて、ちょう
ど良い高さに直角の手す
りがくるように調節可能、
工事なしで簡単に設置で
き安全で便利であると。
究極は Simple is best !

この病院の OT 部門には、“ Driver Rehabilitation & Training Program “というものがある。

これは障害者が再び安全に運転できるようになるためのリハビリである。

ここでは、まずドライバーの評価（詳細な視神経機能の評価、認識、思考能力、四肢機能、病状、内服している薬剤などの評価、患者自身が運転する必要性の評価、車両の改造や特殊器材にかかる資金問題の調査など）が綿密にされ、訓練計画が建てられリハビリが行なわれる。

このプログラムは 1957 年より行なわれており、年間約 300 人が受けている。われらが “Honda” もこれを援助している。



運転シミュレーション装置

評価室の一角にはさまざまな障害者を想定した運転シミュレーション装置があった。



今回、このプログラムの卒業生にお会いすることができた。

彼はロッククライミング中の転落による頸髄損傷で四肢麻痺になった。

なんとか動く左手とわずかに動く右手を使い、介助犬と生活している。



カスタマイズされた車と介助犬

電動車椅子ごと後方のハッチバックから乗り込み、エンジンをかけ、左手だけで運転する。

彼の後方には介助犬がおとなしく座り指示を待っている。

わざと車のキーを落とすと、すかさず介助犬はそれをくわえ彼の左手に渡した。これにも感心した。



常に自分の可能性を追うすばらしきアメリカ人

「どの辺りまで運転するの？」とたずねると ”anywhere (どこへでも)” と笑って答えた。

自分の可能性を確実に実現しようとするアメリカ人はホントにすばらしい。



Michele Berro 女史
(OT Clinical Manager)

案内して頂いた Michele Berro さんにお礼をいい駐車場にむかう途中、今までには見たこともないほどの猛スピードで走る電動車椅子のおじさんが横切っていった。みんな平然としている。驚いているのは日本人だけ。“Viva! American Assistive Technology”と聞こえたような気がした。

3. Casa Colina Centers for Rehabilitation

ロサンゼルス市から東に 43km のポモナ (Pomona)市に、この病院はある。1936 年に ”Mother Smith”として親しまれている Frances Eleanor Smith により、ポリオの小児を治療するために創設された。

”Casa Colina”とは「小さな丘の家」という意味とのこと。

その後、1955 年ポリオワクチン導入によるポリオ集団発生の終焉を期に、あらゆる年齢層を受け入れるリハビリ専門病院となり発展してきた。



正門を入ると、高い椰子の並木の奥にオレンジ色の屋根とベージュの外壁の建物が、2 万坪という広大な敷地の中に整然と並んでいる。

それぞれの建物が Center (外来患者のリハビリを行なう Adult Day Health Center, 自閉症患者の治療の Children’s Service Center, 高圧酸素療法専門の Hyperbaric Medicine Center 等)であり、その複合体が Casa Colina である。

と、Nicole に偉そうに説明した。

カリフォルニアの澄みきった青い空とこの建物のコントラストに、ただ呆然としていた 3 年前の自分を思い出した。本当に美しい病院である。



駐車場に車を置くと、親切な警備のおじさんが迎えてくれ、かわいいシャトルカーで病院玄関まで送ってくれた。本当にやさしい病院である。

現在の外来者数は年間 12,500 人、入院患者数は年間 2,160 人、この 10 年でナント 3 倍になったとのこと。実力もあり、宣伝もうまい病院である。



病院のメインホールの壁にはこの病院の実力と自信の証しであらう今までの患者、医師、看護師、セラピストたちの写真が飾られている。

「わが病院の素晴らしき足跡」とでも訳しますか？



米国の病院内は多くは間接照明である。精神の安定に非常に効果があることが証明されている。学ぶべきことではないか。

間接照明の廊下と正面は院内のカフェテリア



院内を案内してもらっていると、突然おしゃれで立派なキッチンが登場した。ここは入院患者さんが使うキッチンだそう。またもや唾然。

もちろん Casa Colina でも、実際のリハビリを見学させてもらったが、やはり一番印象的だったのは、病院の屋内外の清潔さ、その整然とした美しさである。この日本との明らかな格差を感じた時、医療費のことが気にかかった。どの病院でも医療費のことをたずねると、決まって「保険会社」の話になった。Sheena の通訳を聞き取ったところを要約すると、おおむね次のようになる。日本と違って「国民皆保険制度」がない米国では、患者が治療法を選択する際、自分が入っている保険で何がカバーでき、何がカバーできないのか、またカバーできたとしても医療費のうち何パーセントまでかによって治療法（もちろんリハビリも含め）を選択する。一方、保険会社としては効果のない治療には費用も日数もかけたくないので「保険会社の権限」により、その病院あるいはその医師の治療には効果がないと判断すればどんどん保険対象から削除していく。あるいは、より積極的に保険会社が病院や医師を指定することもある。つまり、患者と医師が治療法を決めるのではなく、保険会社が決めるということになる。米国では患者が早期に自宅退院し自宅でのリハビリを希望する背景には、単に「国民性」だけでなく、「保険と医療費」という厳しい現実がある。さて、これからの日本は。



いつも親切に案内してくれる独身の案内嬢

3 年前にも案内して下さった案内嬢の顔も名前も忘れていた自分を恥じつつ、笑顔でお礼を言って別れた。Sheena が「彼女会うたびに今度結婚するのよって言うくせに、まだ独身なんだよねえ～」と言うのをニタニタ聞きながらみんなで駐車場へ。

最後に、このような貴重な研修の機会を与えて下さった「尚温会」ならびに未熟な私を心配され同行までして下さった「後藤常務理事」に心より感謝いたします。研修中協力して下さった病院の方々に心より感謝いたします。

またまた Sheena、淳、Nicole、ホントにお世話になりました。心より感謝いたします。